

熱が出た

- 生後3カ月以上で38℃以上の熱が出たが、ミルクや水分はある程度取れる
- 夜になって39℃以上に熱が上がってきて本人は多少つらそうだが、水分は少しずつとれる
- 発熱して1～2度吐いたが、その後は続いている
- 高熱でぶるぶると震えもあったが、意識はしっかりしている
- 発熱してインフルエンザが心配

③ 緑

- 高熱となり何度も吐いている
- 水分を何度与えてもほとんど飲まない
- 生後3カ月未満で38℃以上ある
- 発熱して何度か「かかりつけ医」を受診しているが、何日も熱が下がらず、いよいよぐったりしてきた
- 高熱で顔色が悪く、呼吸が苦しそう
- 41℃を超えた

② 黄

- 高熱でぐったりし意識がない

① 赤



日中に
かかりつけ医へ



夜間でも
相談または受診



救急車を呼ぶ

発熱とは

発熱とは、わきの下での体温が37.5℃以上のことを言います。こどもでは40℃以上出ることもしばしばあります。また、2歳までに平均4～5回以上熱を出します。熱が出ても、それだけで夜間でもすぐに病院を受診する必要はありません。救急にかかるのは、単に熱が高いからではなく、全身状態に問題がある場合(痙攣、顔色不良、ぐったり)や他の症状(咳が止まらない、呼吸が苦しい、繰り返す嘔吐、激しい頭痛・腹痛、など)が伴う場合にしましょう。

発熱は体の防御反応

こどもはよく熱を出しますが、その原因の多くはウイルスの感染(かぜ、突発性発疹、インフルエンザなど)や細菌(溶連菌など)の感染によるもので、体の免疫機構が働き防御反応として病原体と戦っている状態なのです。

乳幼児がよく熱を出すのは、様々な微生物に対する免疫を獲得していく成長体験とも言えます。

発熱の主な原因

- ウイルス感染は発熱の最も多い原因です。その多くは風邪です。突発性発疹、水痘、おたふくかぜ、インフルエンザ、ノロウイルスやロタウイルスによる胃腸炎、RSウイルス感染など、こどもが熱を出す多くの病気もウイルス感染によるものです。ウイルス感染では抗生剤は効果がなく、自然治癒が基本となります。一部の抗ウイルス薬を除き直接ウイルスに効く治療薬はありません。肺炎、脳症など、重症化して呼吸や意識状態に問題があれば救急受診の必要が出てきます。
- 細菌感染症は、溶連菌感染、細菌性肺炎、O157などの出血性腸炎、尿路感染症、細菌性髄膜炎など、ウイルス感染に比べ頻度は少ないものです。自然経過では治癒しにくく、正しい診断と適切な抗生剤治療が必要となります。救急的にも重要なものは細菌性髄膜炎で、熱+頭痛+嘔吐があり、ぐったりして元気がない場合は早期受診が必要です。
- 感染症以外にも、熱中症、川崎病、白血病などの悪性腫瘍、膠原病など、発熱が初期症状の病気はたくさんあります。いずれも「熱の他にどんな症状が出るか」を参考にして診断していくものです。
- いずれも、熱が出て間もない時は正しい診断ができないことが多く、40℃を超す高熱だから脳に異常をきたすということはないので、まずクーリングをして様子を見ましょう。